



ASLE-Japan / 文学・環境学会

NEWSLETTER

The Association for the Study of Literature and Environment in Japan

June 30, 2011, No. 30

【役員名簿(2010-2012)】(五十音順)

代表：村上 清敏 (金沢大学)
 副代表：喜納 育江 (琉球大学)
 顧問：上遠 恵子
 西村 頼男 (阪南大学(非))
 事務局長：豊里 真弓 (札幌大学)
 事務局補佐：
 高橋 綾子 (長岡技術科学大学)
 波戸岡景太 (明治大学)
 会計：平塚 博子 (敬和学園大学)
 林 直生 (滋賀大学)
 監事：上岡 克己 (高知大学)
 ニュースレター編集委員：
 木下 卓 (愛媛大学)
 塩田 弘 (広島修道大学)
 辻 和彦 (近畿大学)
 会誌編集委員：
 生田 省悟 (金沢大学)
 高橋 龍夫 (専修大学)
 中川 僚子 (聖心女子大学)
 Daniel Bratton (元同志社大学)
 結城 正美 (金沢大学)
 コンピューターセンター：
 岩政 伸治 (白百合女子大学)
 山城 新 (琉球大学)
 評議員：Bruce Allen (清泉女子大学)
 池田 志郎 (熊本大学)
 石幡 直樹 (東北大学)
 岩政 伸治 (白百合女子大学)
 太田 雅孝 (大東文化大学)
 小谷 一明 (新潟県立大学)
 茅野 佳子 (明星大学)
 管 啓次郎 (明治大学)
 高橋 勤 (九州大学)
 高橋 昌子 (三重大学)
 巽 孝之 (慶応義塾大学)
 田中 恒寿 (札幌大学)
 横田 由理 (元広島国際学院大学)
 吉田 美津 (松山大学)
 院生代表：山本 洋平 (戸板女子短期大学)
 広報：三浦 笙子 (東京海洋大学 (名))
 大野 美砂 (東京海洋大学)
 河野 千絵 (日本大学 (非))
 研究助成：岡島 成行 (日本環境フォーラム)
 高田 賢一 (青山学院大学)
 乳井 昌史 (早稲田大学)
 山里 勝己 (琉球大学)
 野田 研一 (立教大学)
 村上 清敏 (代表)
 喜納 育江 (副代表)

身に余る僥倖

代表 村上 清敏 (金沢大学)

3月11日金曜日、当日は午後3時から本部事務局六階で教育企画会議なる定例の会議に出席していました。途中で比較的大きな揺れを感じましたが、会議は中断されることもなく続けられ、4時半には終了しました。一時退席していた事務職員から東北地方に相当大きな地震があったとの情報を得てはいたものの、頼んであった写真の現像を取りにいつものカメラ屋に立ち寄り、初めて事態の深刻さの一端を知ったのでした。テレビの画面にくぎづけになっていると、カメラ屋の親父が「東京のお嬢さんたちは大丈夫？」と声を掛けてきたので、「東京は関係ないでしょう」と答えたところ、「東京も大変なことになっているみたいだよ」との返事。あわてて携帯で娘たちを呼び出しても通じず、「連絡を待つ」とのメールだけ打って、急いで自宅に向かいました。幸い、午後6時から7時の間には、二人の無事が確認でき、「無理してアパートに帰るな、できるだけ会社のみんたと行動をともにしろ」とメールを打って、とにかく胸を撫でおろしたのでした。

このようなお恥ずかしい内輪話を披露したのにはわけがありません。現地の方々が言語に絶する大変な思いをなさった、また、なさっているのとは対照的に、安穏と生きていた、また、生きていくことに何がしかの後ろめたさを感じるというのは、ぼくだけではないように思われるからです。無論、詩人や作家と呼ばれる人々がそうした生活を送っていると決めつけるわけではありませんが、言葉を生業としている方々はとりわけ、今回の大震災を経て、言葉や物語の持つ力についてあらためて思いをはせようとしているようです。震災から二か月を経た5月10日、朝日新聞10版の文化欄には、こうした詩人や作家の思いを反映するような二つの記事が掲載されました。

ひとつは「3・11後の言葉を探す」との見出しで、高橋睦郎らが開催した詩人朗読会を紹介する記事で、赤田康和記者はそれを以下のようにまとめています。

おびただしい死と終わりのない絶望に覆われた「3・11」後の世界であっても有効な言葉を探りたいと、14人の詩人が日本近代文学館（東京）で先月末、詩の朗読会を開いた。題は「言葉を信じる春」。

和合亮一、高橋睦郎、稲葉真弓の詩句の一部を引用した後、赤田記者は「大災害という限界状況での詩の言葉の有効性に、詩人たちは不安と確信を抱いているようだ」と朗読会をまとめるとともに、「会は七月も開催予定」と結んでいます。

もうひとつの記事は、川上弘美による「言葉の力 物語の力」という見出しのもの。朝日新聞に連載されていた『七夜物語』を終えるにあたっての読者への謝辞という形をとりつつ、3月11日当日の生々しい記憶とそれ以降の作者の鬱屈した心情、罹災した読者からの反応とそれを受けての作者の新たな覚醒が、あたかも上質な短編小説のように見事に描き出されています。引用を中心として、その内容を紹介します。大震災を経験した後の川上は当時の自分の気持ちを以下のように吐露します。

津波。原発。たくさんの苦しんでいる同胞。亡くなったひとびと。手をつかねて見ているしかない自分。手がとどこおる、という易しいものではありませんでした。書こうという気持ちに、一切なれなかったのです。こんな物語を、誰が望んでいるというのだろう。何もできずに、無事にのうのうとここにいる。そんなふうにしただけじゃありませんでした。



(撮影：村上清敏)

そうした川上のもとに、3月16日、罹災した読者から一通の葉書が届きます。その内容は、次のように紹介されます。

津波で、父が行方不明になりました。テレビも、新聞も、悲しすぎて見られません。今はただ、ずっと読んできた連載小説だけを読んでいます。日常というものがまだこの世界にはちゃんとあるのだと思えるからです。

この葉書を手にしたときの川上の衝撃は、以下のように綴られます。

身が震えるような思いに打たれました。葉書を下さった方をささえたのは、おそらくわたし個人の力ではありません。言葉自体の力なのです。物語自体の力なのです。書いていいのだと、許された気持ちでした。

そして、作家としての川上弘美の再生は次のようにして果たされます。

泣きながら小説を書いたのは、生まれてはじめてのことです。むろん、自分の書いている言葉に感情が動いて泣いたわけではありません。震災の後にはじめてキーボードを打った自分の指が少しずつまた新しい言葉を画面に打ち出していることが、何の変哲もないことだと思っていたそのことが、奇跡のようなことだと、初めて感じたからなのです。

ぼくは川上弘美のよい読者ではありません。連載小説『七夜物語』の読者でもありませんでした。でも、この記事は何度も読み返し、読み返すたびに涙があふれ出ます。川上とは違って、涙のわけを分析する力までは持ち合わせませんが、言葉に、物語に曲がりなりにも携わっている自分が「許された気持ち」になったのは事実です。また、「新しい言葉」を紡ぎ出すという行為が「奇跡のようなこと」だとするのなら、そうした「奇跡」に関わることでできる可能性を、今こそあらためて思い返さずにはいられません。さらには、そうした可能性を秘めた学会の一員であることは、身に余る僥倖と思われてならないのです。

「死と再生」の破壊

小 谷 一 明 (新潟県立大学)

「311」震災から程なくして、2011年3月30日、『新潟日報』の「日報抄」で加納実紀代氏のことが紹介された。歴史学研究者である加納氏は、昨年夏に十日町で行われたASLE-Japan全国大会に参加して下さった。林京子氏の基調講演における質疑応答は、今も脳裏から離れない。

加納実紀代氏は広島で被爆した。『女たちの<銃後>』（1995）によると、向かいの家の子「カッチャン」とお濠の前で食用ガエルについて話し、気分を害して裏にあるミチコちゃんの家へ上がり込んでいた時のことである。爆心地から1.9キロであったが屋内にいた加納氏は生き残り、カッチャン、動員先の女学生ミチコちゃん、出勤していた父が亡くなった。

5歳の被爆者は、様々な8月6日そして9日を知るために、多くの被爆者の言葉に寄り添ってきた。林氏もその一人であろう。講演のとき加納氏は、林氏にならって初めて原爆実験が行われたニュー・メキシコ州を訪れたと話した。2000年に出版された『長い時間をかけた人間の経験』を読み、林氏と同じく古希を前にトリニティサイトへ赴き、一つの区切りを付けるつもりであったという。しかし彼女はそこで遠足気分の米国人に遭い、祈りの心づもりがこみあげる怒りにより打ち砕かれてしまう。

国家犯罪を免罪してはならないという思いであろうか。心の区切りを付けられなかったことへの悲しみと怒りは、林氏への訴えかけるような問いかけとなった。この時の張り詰めた、それでいてなぜか親密に思えた時空間に、2人以外の言葉が入り込む余地はなかったように思う。

確かに『長い時間』では、被ばくした大地を前景化することで、個人と大地の中間項にあたる国家への視座が後退したかたちになっている。しかしこの原子野を訪れる前からの林氏を考えると、後退にも一貫性がある。それは個人、国、大地すべてにたいし感情を入れずに見つめるという姿勢である。

林氏は上海滞在時に経験した死者への即物的な眼差しを、ナガサキに向けてきた。徹底的な事実関係の確認こそが、原子野にたいしては優先されるべきだと考えたからだ。これは加納氏が、丸木夫妻による「原爆の囃」というシンボルに持ち続ける違和感につながる。彼女は生き残れた後の、死者への加害者的な眼差しがその絵にはないと言う。自らへの感傷的な態度を捨て、事実を見つめようとする姿勢だ。

同じように被爆者の意識を歪めるとして、林氏は押しあてられる被害者像を捨象してきた。自己の体験や

耳にしたことを見つめ続けた長い時。その後に来る1999年、今も生き物のいない死の大地をまえに思わず涙したのである。

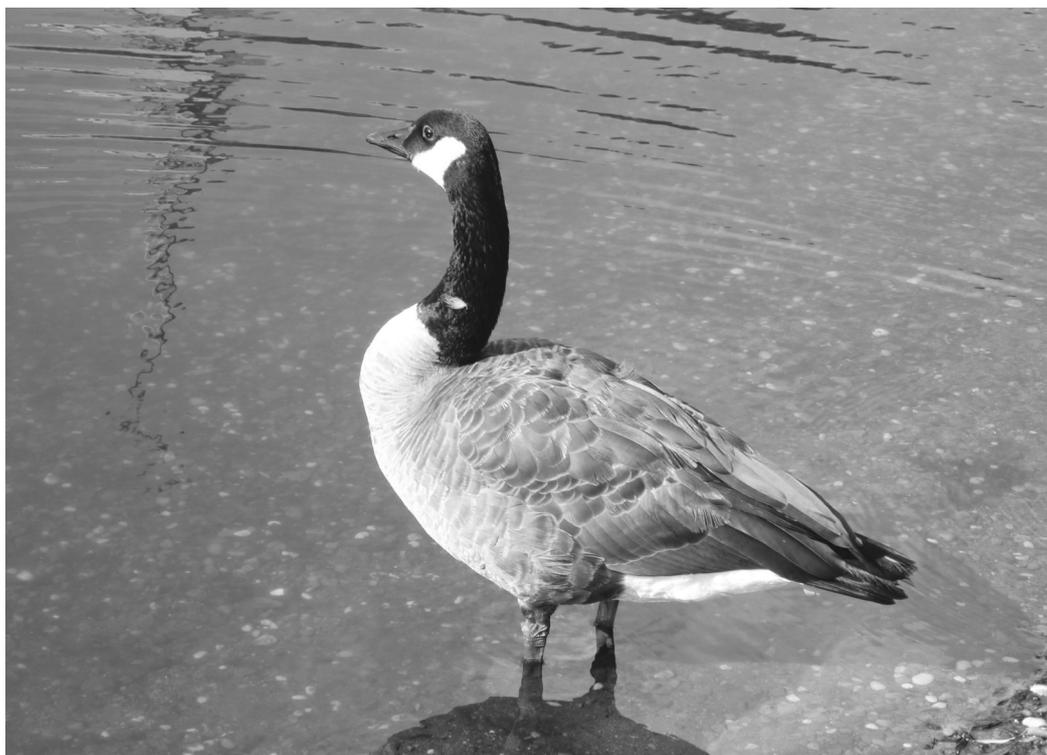
爆発の瞬間、語りえない奇異な風景は、長崎にいて（いさせられて）生き延びた人々の多くに沈黙を強いた。それでも沈黙を破ろうとすることは、死者、自分より深い傷を負った者、傷を「負わなかった」ことで苦しむ人を意識せざるをえず、語り難さは倍加する。そして事実を見つめて語るために、半世紀以上も身体が放置されたことも事実の1つであった。大地に落ちた涙は、その事実を語っている。

『長い時間』の執筆が、国家の免罪にあったわけではないと考える理由が他にもある。それは直後に書かれた放射能事故を素材とした作品だ。2002年の「収穫」（『希望』所収、講談社、2005）では、国策がらみの事故で生活を奪われる人間と、汚された大地が描かれた。

「収穫」の主人公は、異変の起きた工場の隣で農作業をしてきた老人だ。事故の後、老人は地表に出ようともがく地中の芋を見つめている。芋に語りかける様子には、満身に収穫できない悔恨が滲む。最後の甘みを増そうとがんばる芋にたいし、健康診断のためであれ、家を空けることを老人は「誠実」でないと考えた。老人の生存には、汚染土壌が育む命も含まれている。来年はもっと甘い芋を作り、それを「最後の」収穫にしようと老人は犬のシロ、畑に語りかけた。再生が危ぶまれる大地への誠実さは、収穫への希望に表れている。同時に、それは国家のみに罪をかぶせない知的な誠実さでもある。老人は土だけを見て生活してきたわけではなかった。

「収穫」は茨城県東海市で1999年に起こった、JCOの臨界事故を題材とした。核燃料加工施設での事故は、当時、戦後最大の原発災害と言われた。住宅地のなかにある原発下請け工場で起こった未曾有の「臨界」は、2人の命を奪い、一つ間違えば甚大な被害をもたらす事故だった。放射性物質の危険性を理解しない作業員が、原発産業の無理な要求に応えるべく作業を簡易化し、臨界を示す「青い閃光」によって身体を射貫かれたのである。

細胞組織の死と再生というサイクルを破壊した中性子線の威力。20世紀の最後まで、日本はヒバクシャを増やし続けたのである。20世紀の締めくくりとして、林氏が半世紀以上もサイクルを破壊されたままの「死地」へ赴いた理由を、この臨界事故に求めることも可能であろう。



(撮影：HS)

すべてのカムパネルラとジョバンニのために

山本 洋平 (戸板女子短期大学)

震災について何か文章を、というニューズレター編集委員会からの呼びかけにたいし、私は駆け出しの環境文学研究者として、何か書かねばならないような気が勝手にしていました。しかし、何も書けませんでした。一切考えが進まず、筆が進まない日々が続いていました。そんな日々を過ごすあいだ、北條勝貴先生（上智大学・日本古代心性史、環境心性史）とウェブ上でやり取りする機会があり、これを紹介する形でならなんとか書けるような気がしました。それを先生にご相談したところ、ご快諾をいただくこともでき、筆をとる次第です。

* * *

私はあの日、池袋駅西口のスターバックスでカフェモカを注文し、そのレシートを握りしめていました。店内のマグカップがカチカチと鳴る音がしはじめ、カウンター越しの店員と目が合ったかと思うと、突然、普通には立っていられなくなりました。数日前のニュージーランド地震の崩壊したビルの記憶が蘇りました。瞬く間に客たちは席を立ち、店外へふらふらになりながら這い出ていました。店の前は5車線のバス通りでしたが、とたんに路面は歩行者でごったがえしました。ガラス張りのビル群から均等に離れようとする、人は道路上しか逃げ場がないのでした。周囲のビルが轟音とともに揺れて、崩壊しないのが不思議なくらいでした。

その夜、この東京での揺れは東北関東大震災の冰山の一角で、東北各地では地震、津波という連鎖的な被害がたと知りまし。さらに翌日、福島原発の状況が「想定外」に制御不能とがわかりました。友人からネットで噂になってるよ、と渡辺憲司先生の送辞を覚えてもらい、覚えてしまうくらい何度も音読し、くらくらするような数字ばかりの情報と思考停止に陥りそうな映像をやりすごしました。数日してようやく実感したことは、今回の震災が日本人のみならず人類全体に、自然と文明の過酷な現実を突きつけることになったということです。やるべきことをやらねば、と文学仲間と語り合いながらもしかし、酒を浴びる毎日でした。それで、体調を崩す者も出始めました。この事態をどのように考えればいいのか、整理できずにいたのです。

そこで手にとったのが『銀河鉄道の夜』でした。カムパネルラは今頃、この東北の惨状をどのように見ているのか。ジョバンニは「ほんとうのさいわい」を願いながら、あの世へ旅立つカムパネルラを看取れずに、この世でどのように生き残ろうとするのか。それが知りたかったのです。

「ジョバンニ、カムパネルラが川へはいったよ」

「どうして、いつ」

「ザネリがね、舟の上から烏うりのあかりを水の流れる方へ押してやろうとしたんだ。そのとき舟がゆれたもんだから水へ落っこったろう。するとカムパネルラがすぐ飛びこんだんだ。そしてザネリを舟の方へ押してよこした。ザネリはカトウにつかまった。けれどもあとカムパネルラが見えないんだ」
「みんなさがしてるんだろう」

「ああ、すぐみんな来た。カムパネルラのお父さんも来た。けれども見つからないんだ。ザネリはうちへ連れられてった」

(中略)

ジョバンニは、そのカムパネルラはもうあの銀河のはずれにしかいないというような気がしてしかなかったのです。

以上を引用して、「哀悼のカムパネルラ」という題をつけただけの私のブログ記事に、北條先生がコメントをくださったのです。

「たくさんのカムパネルラと、たくさんのジョバンニのために。」

以上のコメントを頂いて私は考えました。私たちは祈らねばならない。カムパネルラのみならず、生き残ったジョバンニのために。

それから、約二か月後、今度は先生のブログに私のほうからコメントをしました。東北の状況へ歴史学的な立場から言葉を紡ごうとする先生に、声をかけずにはおれなかったからです。すると先生は思い出したように返答をくださいました。

「ところで、古い話ですが、いちばん可哀想なのはザネリですね。」

私は、先生のご指摘の真意をはかりかねました。しかし、先生が私を一研究者と扱ってくださっている以上、「なぜですか？」と単純に尋ねかえすことがはばかられ、私は、次のように返答しました。

「らっこの上着がくるよ、でお馴染みのいじめっ子として表象される、ザネリの（カムパネルラを見殺しにした）罪の意識は深いはずで、ジョバンニの「胸が痛くなる」レベルではない、にもかかわらず賢治はなぜザネリの内面に触れなかったのでしょうか。」

すると、先生は、「世のなかの大部分はザネリ」というタイトルで次のように書かれました。

…なんでしょうね、ジョバンニというよりも。ジョバンニだって、もしかしたらカムパネルラだって、ある一面ではザネリである。東北に原子力発電所設置の犠牲を強いて、省エネなんてどこへやら、使いたい放題電気を消費してきた首都圏市民はみんなザネリである。賢治も、自分自身がザネリにすぎないことをよく知っていたからこそ、カムパネルラに憧れてしかなれず、せめてジョバンニであろうとしたんでしょうね。でもきっと、手のなかに切符はなかったんですよ。

賢治は、ザネリ的な文明人のありように思い馳せて、ジョバンニを主人公に据えたのかもしれませんが。震災後の日本列島は、なんだか、蠍の逸話を聞いたあとのジョバンニのような状態でした。蠍は、ある時、いたちに食べられそうになり逃げている際に、井戸に落下し溺れてしまいます。蠍は死線にあつて他の虫を殺して生きてきた自らの生命を省みて、なぜ自分の体をいたちに捧げなかったのか、と無念がって、次のように言います。「こんなにむなしく命をすてずどうかこの次にはまことのみんなの幸のために私のからだをおつかい下さい」

北條先生のご指摘を受けて、「この次には」という箇所が、急に気になりはじめました。蠍の逸話に感化したジョバンニは、「あのさそりのようにみんなの幸のためならば僕のからだなんか百ぺん灼いてもかまわない」と言うのですが、自らの命をさしだすというジョバンニのセリフは、あくまでも、「この次には」という気概にすぎないようも見えてきました。初めて『銀河鉄道』を読んだとき、このジョバンニの気概に驚きました。いまでも、ジョバンニの「みんなのほんとうのさいわい」を切実に願うその姿に感動します。しかし、私はザネリのことを忘れていました。私がザネリであることを、忘れていたのです。

『ポラーノの広場』（新潮文庫）所収「銀河鉄道の夜（初期形第三次稿）」の終結部で、ブルカニロ博士がジョバンニに言います。

「さあ、切符をしっかりと持っておいで。お前はもう夢の鉄道の中でなしに本当の世界の火やはげしい波の中を大股にまっすぐに歩いて行かなければならない。天の川のなかでたった一つのほんとうのそ

の切符を決しておまえはなくしてはいけない。」

ジョバンニはそれを受けて、力強く答えます。

「僕きっとまっすぐに進みます。きっとほんとうの幸福を求めます。」

ブルカニロ博士は第四次稿では姿を消し、ジョバンニは自分で考えることが求められます。カムパネルのためにみんなのために、「ほんとうの幸福」を探す旅がつづくのです。銀河ステーションが美しい場所であることを願いながら、それでも私たちはジョバンニとして、また、ザネリとして、「本当の世界」の海をまっすぐに見つめて進まねば、と思うのです。

アニメーションとエコクリティシズム スタンフォード大学のセミナー風景

岩 政 伸 治 (白百合女子大学)

私は現在スタンフォード大学に在外研究のため滞在しているが、何を隠そう生まれて初めての海外生活で貧しい英語力のためにトラブルには事欠かない。滞在二ヶ月ですでに一年分の恥はかいてしまった気がするが、この度は、そういった失敗にもめげず、会報編集長の依頼に応えるべく、不勉強による恥の上塗りを覚悟で、あえてアカデミックな報告をさせて頂きたい。

ここスタンフォードでは、人文系のものでなくても様々な講演やシンポジウムが毎日のように開かれ、その多くは一般にも開放されている。今回は、私にスタンフォードへの招聘状を書いていただいたウースラ・K・ハイザ教授を中心として文学、哲学、生物学の教員や院生たちで企画されたアニメについての学際的なセミナーについて紹介したい。このセミナーではまず、ハイザ教授が"Ecocriticism and Animation"という演題で発表を行い、次に参加者の間でディスカッションが行われた。

ハイザ教授はまず、参加者に対してエコクリティシズムのこれまでの歩みを俯瞰された。文学研究の新しい潮流として始まったエコクリティシズムは、この分野に於いて確固たる地位を確立し、現在では文学文化研究においてその理論的、批評的立場の再構築の機運が高まっていることを指摘された。そしてその研究対象として重要視すべきものに、アニメーションを挙げられた。以下に、不完全ではあるがその内容をかいつまんで紹介したい。



(スタンフォード大学の時計塔)

ディズニーの映画に始まり、夥しい数のテレビアニメがこれまでに作られ、その多くが人間の自然界との関係について疑問を投げかけてきた。そして特にこの二〇年の間、日本のアニメが国際的に多くの聴衆を集め、モダニズム、ポストモダニズム、そして人間の自然への関わり方の変化について根本的な問題を提示してきた。宮崎駿の作品をはじめとするアニメが子供ではなく、大人向けにシリアスな審美的メディアとして確立したこと、またアニメが自然をテーマにした小説やノンフィクション、詩よりもずっと多くのオーディエンスを有することからも、エコクリティシズムがこのジャンルを扱うことが求められるはずだ。確かにアニメーションにつきものの擬人化は芸術においてジョン・ラスキンらに"pathetic fallacy"=(人間の)感傷的な虚偽と批判されてきたが、実はラスキンの批判自体がその前提において人間をその生息環境から切り離してしまっている。私たちには、非人間および非生物的世界の主体性と従属性を知らしめる新しい形が必要で、アニメーションはその意味で、非人間的、非生物的主体の視点を視覚的に翻訳したものとして有益な研究対象となりうるだろう。

アニメというジャンルは、人間主体と非人間的身体の乖離を組織的に前景化するため、人間性を自動的に特権化しない読みの可能性を開き、また非人間的物質が主体性と従属性を有すると考えることで、人間がそれらの物質から疎外されていることを克服することを求めてきた哲学や文学の伝統とも結びつく。

ロシアの映画制作者、Sergei Eisensteinは生物的、物理的、あるいは時間の制約を越えて変幻自在に変化するアニメの表象を"plasmaticness"と称し、アニメが持つ想像力を、自然を従属化してしまった社会の印と理解しつつ、そこにわれわれが、いやすべてが「個」としてのありかたを超える可能性を見ている。確かに、アニメーションで示される可変性にはものの「個」を超える可能性が示されている。容赦なく画一化され、機械的に評定されている生命と呼べないような存在にとって、「望むものに何にでもなれる」可能性は、高い注目を集めざるを得ないだろう。

ハイザ教授はエコクリティシズムの研究対象としてのアニメーションの有用性について、具体的にはディズニーの作品、宮崎駿の『もののけ姫』『千と千尋の神隠し』『崖の上のポニョ』や高畑勲の『平成狸合戦ぽんぽこ』、手塚治虫の『森の伝説』などをその具体例として挙げながら説明され、その後参加者を交えてのディスカッションが行われた。今回紹介されたアニメでは自然や生命倫理に関するテーマが扱われているため、会場からは、社会倫理と生命倫理という解消し得ない二項対立の問題や、自然をめぐる存在論的、認識論的な問いが寄せられ、学際的な興味深い議論が展開された。

以上、不勉強ながらハイザ教授のセミナーの一部を報告させて頂いたが、私の貧しい英語力のために以下の説明には私の思い込みや勘違いが含まれる可能性が十分あることをどうぞくれぐれもご留意を。尚、ハイザ教授は今回のアイデアを発展させて出版されることを構想されているので、関心のある方々はこちらをぜひ心待ちにして頂きたい。



(英文科の reading room)

2010年秋、韓国ソウル市のSungkyunkwan University (成均館大学) にて第二回ASLE日韓シンポジウムが開催された。前号に引き続きシンポジウムの模様を参加者に報告していただいた。(編集部)

第二回ASLE日韓合同シンポジウム報告

澤田 由紀子 (甲南大学非常勤講師)

暖かいソウルだった。そして人々の暖かいおもてなしを受けた三日間であった。第二回目となったASLE-KOREA とASLE-JAPANとの合同開催の今大会は、再会の喜びで始まった。会場は世界遺産の昌徳宮を見下ろす山の上にある1398年創立という歴史をもつ成均館大学で、開始前の会場では、第1回の金沢大会でお会いした方々と各々旧交を温めあう姿が見られ、私も懐かしい方とご挨拶などを行っている内に、初めての海外発表で緊張した気持ちがだんだんほぐれて、大会を楽しむ心持ちになっていった。はじめにASLE-KOREA、ASLE-JAPANの両代表から前の金沢大会に言及した挨拶があり、ASLE-JAPANの村上代表からは韓国語での長いスピーチもあって和やかな雰囲気の中で始められた。

今回の大会のテーマは「Ecology, Consumption, and Others」。二日間の大会中にLee Namho、山里勝己、Patrick Murphy、Zhao Baisheng、Peter I-min Huang 氏等による韓国・日本・アメリカ・中国・台湾を代表したPlenary Sessionを行い、その狭間にEcofeminism and Vegetarianism, Globalization and Ecological Problem, Environmental Ethics and Embodiment of Consumption, Food and Environmentalism, Bioregionalism and Consumption, Nature and Coexistence in East and West, Politics of Consumption and Imagination, Culture of Consumption in East Asia, Roundtable Session on Ecology and Consumption, Animals and Ethics of Consumption, Reading Session on *The Dwarf* and *The Lake of Heaven*のテーマを冠された計11のSessionが組まれていた。一つのSessionに3人以上の発表があり、それが同時に三箇所の会場で行われ、非常に盛りだくさんの内容であった。私はこうした分科会形式の学会に慣れていなかった為、同時に行われるSessionのどれに参加するか非常に迷って体が二つ欲しいと思った程である。限られたSessionにしか参加できてはいないが、私的な感想を言えば、このような数多くのSessionが組まれていた為、自分のようなものにも後から発表の機会を与えて頂いたのでそれは大変感謝していることでもあるが、発表内容への質問から進んで、Sessionテーマに広がるような討議まで行くには時間が足りない場面が各所で見受けられてせっかくの機会だからもっと討議を、と思うことしばしばであった。しかしその中であって院生によるReading Sessionは対象の本を二つに限って日韓で互いに発表しようという形式で進められていて、双方の院生の質問の応酬の中に環境文学と描写された社会像の理解の重要性が端的に目の前に示されているようで印象深いものであった。Plenary Sessionではアプローチは違えど、Consumption (消費) という問題の根底にGlobalizationの問題が関わり、我々はそこにどう対処すべきかというより具体的提案が数々なされ、興味深く、又ふだん文学の中にのみ拘泥しがちな自らを問い直す機会ともなった。

最終日はEcological Field Tripとして、広大なソウル観光の名所でもある、景福宮の散策が行われた。折しも紅葉が見事な時期であり、快晴と小春日和の中、素晴らしい散策となった。文化と自然を堪能し、また、散策中にもゆっくり交流を深めることが出来た時間であった。

大会中は外国からの参加者は希望で韓国の伝統家屋での宿泊が準備されていて、このことでもとても素晴らしいホスピタリティを受けたと思う。私を含めた日本からの女性参加者は伝統家屋の離れのような、展望の開けた一つの家屋に皆一緒に宿泊したが、オンドルなどの伝統的な設備の他、二重になった障子の扉の開け閉め一つにも日本との共通性とわずかな差異を感じ、そうした日常体験が自然と韓国文化への親和的な心

持ちにつながる体験であったと思う。伝統家屋でありながらインターネットが全室無線でつながるところなどには現代の韓国らしい一面も伺えた。宿泊所の食事や大会中の懇親会での食事はいずれも伝統的な韓国の料理でもてなされ、食事後にカフェに寄るのも最近の韓国のカフェ文化の一端を伺わせた体験でもあった。

大会日程は三日間と短いものであったが充実した時間が流れ、その充足感で歩いたソウルの町中では、環境を復元・向上させた清溪川で、折しもG20開催前の華やかな飾り付けがなされ、人々が散歩したり、幼稚園児が遠足に来ていたり穏やかな風景が見られた。



現代ネイチャーライターの横顔⑤

— 松本零士 —

塩田 弘 (広島修道大学)

日本のアニメーションが世界的に注目を集めて久しいが、現在ではエコクリティシズムによって脚光を浴びている作品も多い。宮崎駿の映画はもちろんのこと、科学者でもあった手塚治虫は、アニメ化された作品だけでなく、短編マンガなどでも多く環境問題を取り上げている。手塚治虫のエッセイ集『ガラスの地球を救え』(1989)では、「自然がぼくにマンガを描かせた」という章に始まり、人間中心主義の思想を否定し、最後には未来人が「宇宙からの眼差し」である「新しい地球規模の哲学」を携えている様子を想像している。

手塚治虫に影響を受けたマンガ家は多いが、1970年代半ばより多くの作品がアニメ化され人気を博した松本零士もその一人である。松本は、インタビュー等で、自らが宇宙を舞台とした作品を多く描いていることについて、「これらの作品は地球環境を守ることに對してもメッセージを込めているんですよ」と述べている。

松本は福岡県出身で、マンガ家として上京するまでの大半を北九州市で過ごした。北九州市は当時、日本の「四大工業地帯」であった。工場から排出さ

れる煙は「七色の煙」といわれ産業の発展が謳歌されると同時に、次第に公害問題が深刻になっていく時代であった。松本の代表作『銀河鉄道999』の宇宙を駆け巡る蒸気機関車モデルの一つが、彼自身が上京する際に国鉄の小倉駅から乗った夜行列車だと述べている。夜の暗闇の中を工業地帯の光のトンネルを通り過ぎる時には、あたかも星の中を駆け抜けている錯覚にも陥るが、その光の先には荒涼とした工場の風景があったのである。このような現実が『銀河鉄道999』の独特の世界観の一端となっているのではなかろうか。

松本のもう一つの代表作『宇宙戦艦ヤマト』は、放射能による地球の環境破壊が出発点となっている。時代設定は22世紀末で、地球は宇宙人の攻撃によって放射能に汚染され、人類は地下に避難していた。人類滅亡を回避する最終手段として、第2次世界大戦中に九州南方海域に沈没した戦艦大和を宇宙戦艦に改造し、放射能除去装置を受け取るためにイスカンダル星に向け宇宙の旅に出掛ける物語であった。

一方、2010年には『銀河鉄道999』の新作アニメが発表された。九州電力の原子力発電所の推進キャンペーンとしてホームページに無料で公開されているもので、物語中で温暖化防止への取り組みや、核燃料のサイクルをアピールしている。奇しくも福島原発での事故の前年にこのような続編が発表されたのは悲しい皮肉である。

■ 広報からのお知らせ

2011年5月8日に、ASLE-J書誌情報更新版のアップロードが完了いたしました。アドレスは以下のとおりです。ご協力下さいました皆様、ありがとうございました。

<http://www.asle-japan.org/pdf/aslej-bibliography2.pdf>

今後も定期的に情報の更新をしておりますので、会員の皆様のご出版やご活動等の情報を広報委員の大野美砂 (misa@kaiyodai.ac.jp) までお送り下さい。次回の更新は2011年9月ごろを予定いたしております。具体的な締め切りなどにつきましては改めてご案内をさせていただきますが、情報のご連絡はいつでもお待ち

ちしております。これまで情報をお寄せいただかなかった方々からのご連絡もお待ちしております。どうぞ
 よろしく願いいたします。

ASLE-J 広報委員

■ 書誌情報

沖 大幹監修『水の知—自然と人と社会をめぐる14の視点』化学同人、2010年

木下 卓『旅と大英帝国の文化—越境する文学—』ミネルヴァ書房、2011年

高梨 良夫『エマソンの思想の形成と展開—朱子の教義との比較的考察』、金星堂、2011年

日本イギリス児童文学会編『英語圏諸国の児童文学 I 物語ジャンルと歴史』『英語圏諸国の児童文学 II テー
 マと課題』ミネルヴァ書房、2011年

平石 貴樹『アメリカ文学史』松柏社、2010年

マシーセン、F.O.著、飯野友幸他訳著『アメリカン・ルネッサンス』上智大学出版、2011年

森松 健介『近世イギリス文学と(自然)—シェイクスピアからブレイクまで』中央大学出版部、2010年

渡部 英喜『自然詩人王維の世界』明治書院、2010年

事務局より

<2011年度ASLE-Japan／文学・環境学会 第1回役員会のご報告>

2011年5月21日(土、9:00～11:30)に、北九州市立大学北方キャンパス(北九州市小倉南区北方4-2-1)本館7階E-704会議室にて、2011年度第1回役員会が開かれました。まず、ニューズレターNo.29の発行とNo.30の進捗状況、会誌『文学と環境』第14号の進捗状況、広報活動(ASLE-USへの活動報告&会員書誌情報の更新)、2010年秋に開催されたASLE韓日シンポジウムおよび今後の連携についての報告がありました。続いて、審議事項として、新規入会・退会者、『文学と環境』投稿における引用・参照と引用文献の書式案、今年度全国大会のプログラム案、ASLE-USからの大会Grant受理者選定要請、会員名簿の作成方法更新について担当役員より説明があり、審議を経て了承されました。また、ニューズレターへの広告掲載、会費未納者の扱いについては概ね提案どおり賛意を得ましたが、2010年度決算報告および2011年度予算案と併せて、8月の第2回役員会および総会にて再度審議を経ることとなりました。なお、2011年8月で任期を終える会誌編集委員の後任および退任される三浦広報委員長の後任について、それぞれ会誌編集委員会・広報委員会に選定を依頼することとなりました。三浦広報委員長の長年のお力添えに対して、代表より謝意の表明がありました。

2011年度ASLE-Japan／文学・環境学会第17回全国大会を明治大学生田キャンパスにて開催します。

と き：2011年8月26日(金)～28日(日)

と ころ：明治大学生田キャンパス(〒214-8571 神奈川県川崎市多摩区東三田1-1-1)

中央校舎6階メディアホール

《大会プログラム》

◎第1日目 8月26日(金)

13:00 開会の辞

13:10～14:10 研究発表1(司会=波戸岡景太)

中村優子(立教大学博士課程)

「<空(そら)>という表象 そのコミュニケーション機能についての試論」

清岡秀哉(明治大学博士課程)「<金継ぎ>をめぐる」

14:20～15:20 ワークショップ

茅野佳子(明星大学)+弓野恵子

「同化政策が奪えなかったもの ハポ(母)から聞いたウチャシクマ(アイヌの言い伝え)」

15:40～17:40 基調講演

講師：今福龍太氏 「Nature's Writing——種子のなかの書物」

18:00～20:00 懇親会（場所未定）

◎第2日目 8月27日（土）

10:00～11:00 役員会（A館5階・総合文化会議室）

12:30～13:30 総会

13:45～14:45 研究発表2（司会＝喜納育江）

塚田幸光（関西学院大学）「核とマネキン ニュークリア・シネマの政治学」

中垣恒太郎（大東文化大学）「災害SF文学の想像力」

15:00～17:30 映画上映と監督講演

映画『うつし世の静寂に』（由井英監督、2010年、96分）

講師：由井英氏＋小倉恵美子氏（ささらプロダクション）

17:30 閉会の辞

◎第3日目 8月28日（日）

10:30 自由参加 生田緑地散策（現地集合・解散）

<会費納入のお願い>

例年通り、6月末発行のNewsletter 発送に合わせて振込用紙を同封しております。年会費（一般5,000円、学生2,000円）の納入をお願いいたします。

口座番号 01300-0-93821

加入者名 文学環境学会

（フリガナ：ブンガクカンキョウガッカイ）

なお、2009年度より、他の金融機関からゆうちょ銀行への振替口座へ振込みができるようになりました。お振込みの際は、以下の項目を指定する必要があります。

銀行名：ゆうちょ銀行 金融機関コード：9900 店番：139 店名：一三九店

当座：0093821 受取人名：ブンガクカンキョウガッカイ

【編集後記】

3月11日の大地震と福島原子力発電所での事故は筆舌に耐えない衝撃的な出来事でした。被災された皆様には心よりお見舞い申し上げます。このような悲惨な現実の中で、これからの環境文学研究／エコクリティシズムの真価が問われているように思われてなりません。今回も執筆者の方々には、お忙しい中多数の原稿をお寄せいただきました。また、村上代表には写真の掲載依頼にご快諾いただき、北九州市の門司港の風景写真をご提供いただきました。皆様ありがとうございました。（HS）



【発行】

代表：村上清敏
事務局：札幌大学 豊里真弓
〒062-8520

札幌市豊平区西岡3条7丁目3番1号
Tel / Fax: 011-852-9617（直通）
E-mail: toyosato-m@sapporo-u.ac.jp

【編集】

編集代表：木下 卓

〒790-8577
愛媛県松山市文京町3番
愛媛大学法文学部・人文学科
E-mail: kinoshita.takashi.me@ll.ehime-u.ac.jp